

オンラインでのアメリカの図書館情報学修士号取得の経験



2016 年 9 月 20 日（火）10 時～ 12 時

国際大学松下図書・情報センターにおいて

話し手：小島勢子氏（国際大学松下図書・情報センター司書）

聞き手：中村百合子（立教大学准教授）

図書館への道

（中村）これまでのキャリア・ディベロップメントの流れと内容っていうのを教えてくださいませんか。

（小島）はい、簡単な「年月」、「履歴」、「その他出来事」と「自己研鑽」という事で、簡単にこう[A4 一枚裏表に]まとめさせていただいたのですが。

（中村）すごい。

（小島）1987 年の 3 月に大学を卒業いたしまして、すぐその大手保険会社に。

（中村）まさにバブル期。

（小島）そうなのですね。図書館とはまったく縁もゆかりもないのですよ、実は。それで、6 年ぐらい勤務いたしまして、1994 年の 5 月になりますが、配偶者が新潟県出身、このまさしく南魚沼市出身ということで、新潟県の南魚沼市に移住することになりました。私は当時、U ターンするにあたって仕事を辞めていましたので、無職です。

（小島）それでですね、まあ変な話。

（中村）ご自身のご出身はどこなのですか。

（小島）私は、出身っていったらあれなのですが、実家は神奈川県の大船市なのですね。

（中村）ええっ、私、大船出身よ。はは、まあいいや。

（小島）ええっ。

（中村）はい、大船育ちです。

（小島）やだ、大船、近いですね、大船で降りるのですよ、うち。ぎゃあ、素晴らしい、じゃあ後でまた、ごめんなさい。

（中村）まあそれはいいとして（笑）。

（小島）それであの、車の運転があまりできなかったので、運転の練習をしていたら国際大学に来てしまいました。で、ここに車を停めて散歩をしていたら、図書館に来てしまいました。で、図書館に来た時にそこに座っていたカウンターの方に、学生さんですか、みたいなことを聞かれて、いいえ違います、という話をしたら、実はアルバイト募集していますって。え、いいのですか、させてくださいって言って、履歴書を出したら OK ということで、そこがはじまりです、この図書館との。だから本当に何か縁があったのかなんなのか、ということで、図書館ではパート契約職員を経て、今は専任職員となっています。

たまたま配属となった図書館業務に魅力を感じて、まあ言えば、大学といえば図書館が私が一番大切な場所だと思っているので、勉強の礎というか、研究を支える図書館部門こそが、自分で言えば、私、すごく楽観的で、私の能力を活かせるって信じてっていう感じで働いているのですけども、働きながら図書館関連の資格と修士号を取得しましたというのが全体的

な話です。

資格としては、先生もご存知のように、玉川大学の通信教育にて 1999 から 2000 年の間、1 年間で司書資格を取って、そしてその後 2001 年から 2002 年に、同じ玉川大学の通信教育を経て、学芸員の資格を取得しましたということです。で、その間、実はですね、私、司書の資格を取る前に大きな病気が発覚したのですね。それで、しばらくちょっとなんていうのかな、しばらく仕事ができなかったのですよ、治療で。その時にもう後 3 ヶ月遅かったらあの世行きでしたっていう感じだったのですね。でもその時に自分の人生を考えたのです。ああもしかしてこのままでいいのかなとか、まあ今回はね、命が助かったけど、なにか、自分のやりたいことって何だったのだろう、とかっていろいろ考えるときがあって。で、命が助かったのだから、このままぼっとね、過ごしてしまっていていいのだろうかなんて考える時がすごくあって。その時に私、図書館で仕事したじゃないですか、パートといえども。それだって、もうちょっと真剣に、パートなのだけれども、もうちょっと勉強して、どうせ働くのだったら、自分が勉強してもっとこう利用者の人が、なんていうのかな、この人に聞いてよかったって思えたりとか、この人のところに来て面白い資料が見つかったなっていう風に思えるような存在になりたいなって思っ。じゃあまずは司書の資格からやってみようかなっていうのが、はじめの第一歩ということです。それで、司書の資格を取って契約社員になって、正職員にはなったのですが、体の状態も落ち着いてきて、それで実はこれ体のこと書いていますけれども、三十もすでに中盤、後半にかかっている、家庭の方にも願いがあったりして。

(中村) 充実させたいなと。

(小島) はい。ただそれだけじゃなくて、もちろんその学芸員の資格とか、あとその東京で紀伊國屋さんと慶応義塾大学の DL 講習会 (デジタル・ライブラリアン講習会)。

(中村) 糸賀 [雅児] 先生のところですね。

(小島) そうそう。そういう講習会があったので、週末に二期連続でって通った記録があったのですよ。私、忘れていたのですけど。

(中村) この時代だから、デジタル化していかなくないからっていうので行われた講習会ですよ。日本の図書館専門職養成が大学院化にできなかったことを受けて。なかなかね、日本ってやっぱり資格がどうしても文科省によって定められているのですよ、司書資格が。資格を超えてやるっていう発想がなかなかみんなになくて、で、たぶんこれをはじめたのじゃないかなっていう。でもこれって有料でしたよね。

(小島) 有料でしたね。

(中村) ご自身でこれは。

(小島) もちろんそうです、それはもちろん。

(中村) じゃ、何か見て、『情報管理』か何か雑誌で見て？

(小島) だったと思いますね。この頃はようやくで資格を二つ取れて、もうちょっとっていう風に考えていた時期だったので、自分の働いた分を自己投資じゃないですけども、それに回すっていう形で主人も別にね、いいよって言うてくれたので、稼いだものを全部、自分の。

(中村) あら、すごい。先日、[シラキウス大学の] Jill (Professor Jill Hurst-Wahl) に会っていろいろ話を聞いた時に、私、[日本の] 学生にもっとね、アメリカレベルの教育を、ライブラリー・サイエンスの教育を受けてもらいたいって思っているのだけど、受け入れてくれるかっていう話をしたら、大学として受け入れるのはいいけど、誰が払えるの、みたいな。

(小島) そう、それはね。

(中村) でも当時の方がまだ安いでしょう。

(小島) そう、今はもうすごく。今はどれくらいかはちょっとわからないんですけど。

(中村) 2年で500万とか言っていましたよ。

(小島) そうですね、それくらいはかかりますね。

(中村) え、それくらいかかったの。当時も。

(小島) かかりますよ。で、私がちょうど受けた2007年から09年って今よりももっと円安なのですよ、1ドル130円くらい、30円から37円くらいの時だったので。その後、円が高くなってよかったのでしょうけど、まだそんな感じだったから。で、アメリカ人の3割増しで払わないといけないわけでしょう、だからそのくらいかかりました。

(中村) お給料全部を自分のことに使ってっていうので行けなくもないでしょうけど、やっぱりなかなかみんなできないですね。

(小島) そうですね、だからシンガポールにいた同級生なんかは、やっぱりあの、できるだけ要するにたくさん、って言ったらかおしいかな。彼はなんかたくさん取りたい気持ちがあったりしたのだけど、お金が貯まらないから今学期、受けられないとかっていう感じで言っていたのですよ。で、もうちょっと貯めてからだって、じゃないとあれだからって、4年ぐらいかけて取ったのかな、4、5年、やっぱり働きながらでしかも急に払えないからって言って、彼、すごく優秀な人なのだけれども、そのお金の面で少し。

(中村) 図書館勤務の人ですか。

(小島) 彼はね、IT関係ではじめたのね。でも図書館関係に切り替えたいって言って、今、シンガポールの大学マネージャーをやっているのですよ、そこに転職したのね、これ(MLIS)を取ってから、ステップアップしているのです、彼。彼なんかすごく優秀だったけど、そのお金の面では急にはちょっと科目取れないっていうことを言っていた時期があったので、それはそうかもしれない、ネックになるかもしれない。

(中村) 基本的にね。なるほど、それがキャリア・ディベロップメントとしては[ハードルになる]。

(小島) 図書館に関してはこういうところなので、人数も少ないし、もうある意味で何でもしなくちゃいけない、掃除から、ね。いろいろなことは経験させてもらって、私も古いので。結局、1994年に入ってはじめ目録業務を、雑誌の目録業務入っているし、ILL、閲覧関係、図書館業務全部、全てやって、今はレファレンス業務自体に、電子媒体の管理ですとか、導入とか契約とか、学生アルバイトのトレーニングとか、あとシステム関係、図書館のシステム関係とか、Webとか、ということで何でもしなくちゃいけないっていう感じ。プラス2014年から管理職なので、図書館の運営全般という事でやっていますけども。

(中村) 室長代理っていうのはこのメディアセンターの室長の代理っていうこと？

(小島) そうですね、室長はあの。

(中村) どこ室の代理。

(小島) ここです、国際、あ、ごめんなさい。ここの松下図書・情報センターの。

(中村) センター長代理。

(小島) 代理です、そう、はい。その室長は、今はコンピューター関連の人なのですね。

(中村) この上[の階]にいらっしゃるっていう人。

(小島) で、私は室長代理という事で、このコンピューターのセクションと図書館のセクションを一つとして情報センターって呼んでいるのですよ。

(中村) なるほど、なるほど。

(小島) そうなのです。

(中村) では、図書館の方のトップってことですよね。

(小島) トップじゃないんですけど、2人しかいない。はい、どちらかというと年代も長いし、せざるをえないっていう感じですね。あとみなさん、異動でいなくなっちゃっているの。

(中村) ここ (小島勢子「図書館員としての「最初の一步」：私の場合は通信教育から」『専門図書館』No.220, 2006, p.31-36.) にもけっこう、その話、異動させられそうになってみたいことを書いている。

(小島) 実際には私が入った時には9人いたのですね。

(中村) わわ、最初、そんなだったのだ。

(小島) で、だんだん減ってきて4人だったのが、4人の時は専任3人で臨時が1人。で今は専任2人で臨時が1人かな。

(中村) 減ってきているっていうのは、ITの方に人が取られているっていうのですか。

(小島) いえ、ITの方も減っているなあ。どちらかと言うと、募集の関係とかキャリア関係とかそういうところですね、大学の。どうしてもリクルート関係の方に。

(中村) 図書館はコアのメンバーと学生アルバイトで何とかしてくれっていう感じですね。

(小島) そういうことですね。だから図書館自体も異動の対象になっているけれども、私はたまたまそういう。

(中村) いや、でもキャリア・ディベロップメントに努力されているのが大きいんじゃないですか。やっぱり。だってこれ MLIS をアメリカの大学院から取った人を異動させるのは、大学としての資産としても、人的資源の配置としても間違えているよね。

(小島) いや、そうなればあれなのかなって思っているんですけど、今のところはね、そういった対象というかにはなっていないっていうか。だからこそ、自分自身がもっと、これでいいのだって思っちゃいけない、常にやっぱり危機感を持って仕事をしないと。しかもここお金がないところなので、お金も全然かけられないのですね。何がじゃあ大切かっていうと人なのですよ。お金がなくて、物が買えないのだったらせめて人。人のところでこうしないとダメなのですね。というか、やっぱり人が大事でしょ。

(中村) アイディアとか。

(小島) そう、っていう感じですね。あとは図書館の方もね、図書費とか削れ削れって毎年言われてて、資金も削れ削れって言われているのだけど、なんとか削らなくて、削られなくてきている。で、どうしたらいいかっていうとやっぱり使わせないと削られちゃうでしょう。だから常にどうやって使わせるか、電子媒体の方も常についていうことで、講習会を開いたりとか。

(中村) データベースとか。

(小島) そうですね、今週の金曜日からはじまるんですけど、そういうことをしたりとか、マメに学生にちょっとずつ声かけして連れてきて、こういうのが何て言うのかしら、あなたに役立つんじゃないかっていうことで、もうワンツーマンでアプローチをしないと使わないのですね。使えば利用統計で出てくるし、それなりにね、実績があるのに削られないじゃないですか。だからそういうことをしていかないと本当にね、資料も削られ、施設も陳腐化したらもうね。せっかく学生さんとしては海外から来ているのに申し訳ないなっていう気もちがいっぱいになっちゃうので、私はもう、先生方はお金を持っているからいいんですけど、学生はね、そういう感じで、夢をもって希望をもって来ているのにそういう人たちにやっぱりね、力っていうか、こっちが戦わないと学生さんたちが可哀想だなっていうのは、常にそういう気もちですね。だからちょっと。

(中村) なるほど。今はけっこう、サービスをいろいろ充実させるというところに。

(小島) うん、私はどちらかというそうですね。学生とのそうですね、接点ですね、リエゾンじゃないですけど。だから常に利用者のところの様子を見ているですね。どちらかというともう現場主義なので、現場の子と、顔見て話をして、必要としているものとかを、自分の体で感じてそれをもってくるっていうことは絶対する、人づたいじゃなくて自分の目で必ずってことはするようにしているんですけど。

オンライン・コースでのMLIS取得を目指す

(中村) ありがとうございます。ちょっと一つ進んで、シラキュースのその MLIS でしかもオンラインで学位を取得された経緯っていうのはどんな感じですか。動機は。

(小島) そうですね、動機なのですけども、実はこの大学の図書館っていうのが北米の大学図書館をサンプルにして。

(中村) モデルにして。

(小島) そうなのですよ。で、当初、カナダから来た、ね、MLIS 取得の方ですとか、それで中国系アメリカ人のそういう方とか、あとアメリカ人の MLIS の取得の人がいらっしまったのですね、この大学図書館に。

(中村) ええっ、ああそうなのですね。

(小島) その人たちがライブラリアンでやってくことで、まあ当時ね、その当時って言えばまあ。

(中村) ここの 80 年代、90 年代ですか。

(小島) 80 年代終わり、90 年代。レファレンス・サービスがもう図書館の中のコアですよ、いわば、そういう時代だったじゃないですか。レファレンス・ライブラリアンが中心になって図書館をっていうそういうミッションがあった時代だったと思うんです。今はね、レファレンスサービス自体がどうなのかっていうのもあるかもしれないんですけど。で、私、そういうところで、要するに仕事をしてきたので。

(中村) なるほど、じゃあちょっと待って。その 4 人とかの内の 1 人がシニア・ライブラリアンとかっていう、そのボスが外国人だったってこと。

(小島) そうですね、C さんっていう人がカナダのトロントっていうところに帰ったし、あと W さんっていう人もいたのですけど。彼女今あの、国連にいますのですね。国連のそのインフォメーションにいますのですよ。それからあと E さんっていう人はカンザスにいますし、あともう 1 人日本の方もいらっしまったのですけど、その人はちょっと転職されて他の図書館に行かれていて。で、もう 1 人いますよ、ごめんなさい。その前に T さんっていう方がいて、その人はブリティッシュ・ライブラリーにいたのですけど、こちらに帰ってこられて、日本人ですよ。ここにいらっしまって、で、千葉大学でも教えていましたね、つい最近まで。もう今はリタイアされて悠々自適な。その私の前にそういう人たちが必ずいたのですよ。

(中村) なるほど。この外国人の人たちはそれこそリクルートをかけていたということですか。

(小島) そうですね、大学として。

(中村) なるほど。日本に来てライブラリアンとして働きませんかみたいな。

(小島) そう。

(中村) そういう人たちがずっといたのだ。

(小島) いたのです。

(中村) それがいつ途切れる。え、日本人の人たちは MLIS は持ってない？

(小島) 持ってます。

(中村) あ、持っている。それが二人。

(小島) それは絶対持ってないといけない。大学としてこの図書館のそのポジションとして、その、要するにそのアメリカのアクレディットされたところ (ALA-Accredited) の図書館の修士の資格を持っている人っていうのが条件。

(中村) それはずっと変わってないのですか。

(小島) 今はもう変わっちゃったのですよ、別に持ってなくても。そういうのではないと思う。でも 2000 年のはじめくらいまでは大学の図書館のミッションとして 1 人そういう人を置くていう事になっていましたね、このところは。

(中村) なるほど。わかりました。

(小島) そういう文化的なものがずっとそういうのがあって、私はそういうところで働いてきたので、もうどちらかというとその日本の図書館っていうよりも北米の図書館でやってきたことがもう中心なのですよ。それがバイブルなのですよ。そういうライブラリアンの方からそういう話を聞いたりとかっていう。どういうサービスをしてきたのかって常にそうやってもう洗礼されているので、あんまりこの日本のことっていうよりもそっちにそうかそうかっていう感じで。っていうのがきっかけですよ。で、最後その取得されていた方が他に行かれたっていうのをきっかけにレファレンスのその席をクローズしたのですよ。結局ほら。

(中村) もうその時は 2 人体制だったのですか。

(小島) その時は 4 人です。

(中村) 正規まで含めて。

(小島) 4 人です。あ、3 人プラス臨時で。で、そのもう 1 人ライブラリアンの人いたから 5 人か。で、もう座ればいいじゃないって言われたのです。でも私の気もちとしては座れないのですよ。私、司書の資格だけでそんな修士持ってないし、その席に、あその席に座れるってとてもじゃないけど。

(中村) 自分じゃ思えなかった。

(小島) 思えないですよ。

(中村) 謙虚ですねえ。

(小島) いや、でも本当にそう思いますよ。だってそういう人たちがいて、やってきたポジションの席なのに、私みたいなのがなぜ座れる。それは無理でしょってことになる。勇気がないねって、勇気の問題じゃなくてそれはクオリティの問題。私はそこまでね、クオリファイされて (qualified) いまさんと、駄目ですと、って言って断ったのです。私もすごく悲しかったのです、今でも覚えています。悔しいっていうかやっぱり自分のそのそれだけのレベルが達してないのはすごく。

(中村) 残念でね。

(小島) 残念で、でもああ、勉強したいなとは思っていたのですよ、それ聞いて。私もでも英語もいまいちあれだしなぁと思って悶々としていたっていうのは私、今でもあります。その時から少し勉強したいなっていうのを思っていて、だけどでも学生にとってはそういうのはあんまり関係ないのですよ、そんな修士がなんとかって。図書館の人っていうので、お問い合わせは常にくるのですよ、なんかね。

(中村) そうですよ。

(小島) 私が窓口にいるとこの質問これでいいのだろうか、って誰にもこう相談できないし、先生に聞いてとか、もうそんな感じですよ。もう先生に聞くしかないって、もうわけわか

んないこととかを答えたりとか、すごく嫌でしたね、私ね、自分が恥ずかしいっていうか、こうね、学生の要求に。で、たまたまその 2005 年に私立大学図書館協会主催の海外集合研修で、イリノイ大学図書館の。

(中村) ありますね、アーバナ・シャンペーン (Urbana-Champaign) でやっている。

(小島) そう。あ、で、1 ヶ月じゃないんですけど、5 日間だけの研修だったので。

(中村) あ、1 ヶ月のもあるのですか。

(小島) ううん、5 日間だけ。5 日間。だから 1 週間ってことか。それに応募して、それでまあいいですよってことになったので、その当時、たぶんご存知かな、U さんとかご存知ですか。

(中村) ああ、U さん。

(小島) U さんと私とあと同志社大学の、今もう異動しちゃったけど S さんっていう方と。

(中村) 知っている、知っている、S さん。私、同志社に勤めていたのですよ、前。

(小島) ああ！

(中村) 事務室に異動している。

(小島) そうそう、S さんとあと駒沢大学の O さんっていう方と、その人も別のところに行っちゃったみたいで。あと明治大学にいらした N さんっていう方がいらっしゃったんですけど、その女性 5 人で行ったの、もうすごく楽しかったのね、すごく気が合って。楽しかったのもいいんですけどそれ自体に、やっぱりそのイリノイで研修を受けたっていうことが私にはすごい刺激になって、これはもう勉強するしかないって思って、もう飛行機の中でも応募すると、もう決めていたのですよ、私。

(中村) もう、帰りの。

(小島) そう、もう絶対、応募すると。で、帰ってから、2005 年に帰ってきて、2005 年の 10 月の末だったのですよね、はい、確かそれが。で、応募するには試験とか必要なんで TOEFL とか GRE とか一気に受けて、2006 年、だから翌年の 12 月に出願したと。

(中村) すごいね。でも準備 1 年でなかなかできないですよ。けっこう、TOEFL も高いですよ、要求値が、シラキュースは。GRE も高いのじゃなかったっけ。

(小島) けっこう、短期集中でパーツと。まあ得点もね、そこそこあればいいなと思って、すごく望みは低くて最低限のは聞いてたから、それ以上取れば勉強できるなって思って、とにかく得点取ってればいいやって思ったから。

(中村) いや、それでもすごい。1 年で準備された。

(小島) いやいや、っていう感じですね。それが経緯だから、私の。

(中村) そう、そんな 5 日の研修って、私これがそんなにすごいって始めて知ったのだけど、何が起きるのですか、そのイリノイの。

(小島) 行ったところがよかったので。そのイリノイのやつはそれこそね。

(中村) メンバーがよかったですか、それこそ。まあ U さんという方は相当、勉強家ですよ、ね。

(小島) あのね、他の人たちがどうしているかはわからないけど、私たち、相当きちっと勉強してきましたよ。質問事項もきちっと揃えて、それぞれ何が聞きたいかっていうのを明らかにしてまとめて、それで行く前の事前のやつ、準備ばっちりにして行ったから、向こうとしての受け入れもだから相当こっちの方で気合い入れているなっていうのはわかったと思うのですよ。

(中村) 図書館のアーバナ・シャンペーンの図書館の色々な部署に行ってインタビューする感じですか。

(小島) そうですね。その当時の図書館長もきちっと対応してくれたし、それぞれのヘッド

の人たちがみんな出てきてくれたんで、レベルとしてはヘッド・レベルの人たちが全員対応してくれたって感じでしたね。

(中村) それで聞いた内容がその、こういうこと実現できたらいいなっていうものだったってことです。

(小島) やっぱりやっていることが全然、今の自分と比較した時に、あ、全然違うんだなっていう感じ。現場も見せてもらったから。その時のライブラリアンの人たちがまたキラキラしているように見えたのかもわからないけど、なんかこれってもう全然その次元が違いすぎる。ただやっぱりこう話聞いていて、自分のやってきたことに自信をみんな持っているのですよね、勉強してきたことやってきたこと自体に、なんか躊躇することがないのですよ。

(中村) わかります。

(小島) 私はあんまりこうなのですがって言うことは言わないのよ。こうなのです、みたいなこという、こうじゃないといけないのだ、みたいな、私、そういうのが大好きだから(笑)、そうかああ、とかって思って。今の自分はああ自信がなくて引っ込んでるけど、私もそうではなくちゃって、そのためにはまず最低限そういう知識をつけないとそういうのはもうできない、アピールできないっていうのが、もうその研修自体の、その研修の内容っていうよりも。

(中村) 出会い。

(小島) 精神的なものっていうかな、それは大きかったと思う。

(中村) なるほど。そこに行く、応募しようって思ったのは何だったのですたっけ。

(小島) シラキュースを選んだやつ、じゃなくて。

(中村) いや、その前のイリノイに行こうっていう件。

(小島) あ、私立大学図書館協会の方からそのお知らせがきますよね。で、回覧で回されてきて、パッと見た時にすごく心惹かれたのね。ちょうど学期的にも落ち着いて忙しくない時期だし。

(中村) やっぱり1週間ぐらい行かせてもらえるっていうのが。

(小島) そう、そう。で、土日挟んでの1週間だし、それを一応室長に相談したらいいよって快くおっしゃってくださったので、それがまあ大きかったかなって、いいよって。その分じゃあ頑張って勉強してきてくださいっていうことで。研修に関してはすごくうちの大学の図書館に関してはみんな行けっていうね、私も今、数少ないけどもアルバイトの人にも研修に行っていきたいし、なるべく研修に行っていってことで、研修に関してはできるだけ行ってもらうようにするようにしている。お金かかってでも。そういうスタンスですね、この図書館自体が。

(中村) このイリノイのこれってちょっと私、詳しくないのですが、自費も負担があるのですか。

(小島) この当時は自費は、なんか大学の方で5万くらい出さなきゃいけなかったと思うのですね。あとは全部出していただいた。

(中村) じゃあこちらの大学で5万円出したのだ。へえ出してくれたのだ。

(小島) ええ、確か出してくれていましたね。確かそれくらい出さなくちゃいけなかったと思う。

(中村) そっか、そっか。でもこれより前からオンラインのコースは一応見てはいたのだ？ インタネットというか。アメリカの図書館情報学修士号を取得するのであればっていうので。アメリカの。

(小島) そうですね。なんかこうできるかなと思ってちらちらとは見てはいたのだけど、

ううんどうかなってというのがあって躊躇していましたよね。

(中村) 2003 年から 2 年ぐらいはなんかどうしようと思いつながら、そこ（レファレンス・デスク）も閉めちゃったし、悶々としながら考えていたのですね。

(小島) そうですね、そんな感じでしたね、はい。

(中村) そっか。で、帰る飛行機の中でもうこれやるしかないって思っつて。

(小島) そうそう、もうその時に。飛行機の中で。

(中村) それで U さんは確か MLIS を持っているのじゃなかったっけ。

(小島) 同じじゃなかったでしたっけ、ハワイの。

(中村) あ、ハワイですか、彼女も。

(小島) そうです、彼女も優秀な方で。たぶん同志社の方でもね、一昨年くらいまで教えていらっしやいましたね、土曜日。

(中村) ああ、そうですか。へえ、じゃあ私が辞めたあと。

(小島) そう、同志社の方もやっぱりもう体キツいって言っつて、土曜日に彼女わざわざ同志社大学に行かれていたのだけれども、2 年前に私、京都に行くことがあっつて、彼女とちょっと食事したのですが、もう今学期で辞めるって言っつてたからもうお辞めになっているはず。

(中村) すみません、ちょっと脱線しましたが。その U さんと話したというのでも MLIS を彼女は持っつていて、それも多少は影響しているのかな。

(小島) そうですね、彼女もやっぱりその勉強したっていうお話をかがっつていたので、そういう意味では、彼女はそのハワイのそのキャンパスでっつていうことだったけれども、私はちょっとキャンパスには行けないので、何かしらで取れたらいいなっつていうそういう憧れみたいなものがありましたよね。もちろんお話をかがっつていて。

(中村) それで帰っつてきてから、インターネットでこのシラキュースのオンラインの教育の。

(小島) そうですね。本当はそのイリノイの方も考へていたのですが。連絡したのですよ。そうしたら、オンラインの教育としてはイリノイよりもシラキュースの方が歴史も長いし、施設の的にも。施設も見せてもらったのですね、実は、オンラインのをやっつてるところ。私、これ見学行っつてる時にちょっと興味があっつたのでオンラインのコースがあるんだよっつておうかがいしたので、どういうところでやっつてるのですかっつて見せてもらったのですが。シラキュースに比べて、その当時は、私、今はわかんないですよ、なんかすごくこう、まだその洗練されてないっつていうか、ちょっと難しいかなっつていう感じだった、日本とそっつちでやるのと。

(中村) でも確かに何か、イリノイは、やっぱりオンキャンパスの方が中心ですかね。

(小島) そうですね。

(中村) 今もそうなんじゃないかな。

(小島) もちろんオンキャンパスですね。オンラインのだけのっつて見ると、うーん、イリノイの方がもうちょっと厳しいかなっつていう感じがしたのですよね。その要するにライブでの授業っつていうのになるとすごく時差があるじゃないですか。こっちはそんなライブでっつていうのはなかったけれども、向こうライブでっつていう風になっつたりするし、あっつたのですよね。

(中村) サイマルテニアス (simultaneous)、要するにその同時に。

(小島) 同時に。あれやっつてると仕事やっつてっつてなると、ちょっとそうなると難しいかな。

(中村) 夜中に起きてとか。

(小島) そう、仕事かもしあっつてバッティングしてっつて、なんかかなり難しいかなっつていうのはありましたね、印象で。

(中村) それチャットっていうか、そういうのでみんな座るってそういう感じですか。

(小島) そうそう、それが確かあったと思うのですよ、その当時。今はわからないですけど。シラキースのは調べたら、まあコアで絶対のっていうのはキャンパスだから、キャンパスに行ってやるやつだから、夏休み行けばいいし。その他はそういうのがないのもあったりするんで、こっちの方がまだ選択肢があるかなって感じがしましたね。

(中村) なるほど。この『専門図書館』の雑誌の方に、国会図書館の方が、Tさんっていう人がこのシラキースで取ったのですかね、このMLSって、そんなの書いていますよね。これはきっかけじゃないの？

(小島) 違います。

(中村) 私、これを読んだ時、ああ、小島さんはきっとこのTさんっていう人のこの経験談を読んだのかなって思ったのですけど。

(小島) 違うのですよ、知らなかった。

(中村) じゃあこれは関係ない。

(小島) うん、これね、私、彼女とも会ったの。私が2007年にオンキャンパスにいる時に、デジタル・ライブラリアンのコースっていうのが、サティフィケート・コース(certificate course)みたいなのがあって、彼女、ちょっとシラキースにちょうど来ていたのですね。その時に会って、そういえばこれで読んだことある人だと思って、その時にちょっと会った覚えがあります。

(中村) ええ。じゃあその決める時にTさんのこれを読んでっていうのとかではないのだ。

(小島) じゃないです。じゃなくて、一応イリノイと比べてどちらの方が、自分が仕事をしながらやりやすいのかなっていうのを考えた時にこっちの方がいいと思ったのですね。

(中村) なるほど。

(小島) もちろん仕事がなく、オンキャンパスだったら、私、このイリノイの方にも研修にも行っているし。

(中村) 感動したから。

(小島) 感動したからここで、っていうのはあったけれども、っていうのもライブラリー・スクール、一番じゃないですか、っていうのあったけれども。ね、家族もいるし、そんなこともできないし、そんなね、プラスαの勉強なわけだから、こうやりやすい方でって言って、もうシラキース以外なかった、選択肢がなかった。

(中村) なるほど、わかりました。時期的には2007年の夏から。2006年の12月に出願して次の秋から。

(小島) そうです、もう。

クラスがはじまる

(中村) 夏はいらしたのですよね。

(小島) 夏は行きましたね。

(中村) 1回、行かなきゃいけなかったでしょ。

(小島) そう、行かなくちゃいけない。絶対に行かなくちゃいけないコースがあって、2つ。で、それを取ったのですね。(表「各学期の受講科目」参照)

(中村) それはイントロダクション(IST 511)とこれ(IST 601)か。

(小島) そうですね、これ511と601は絶対。

(中村) なるほど。

表「各学期の受講科目」

Summer 2007 - On Campus (IST613 は Online)

IST 511: Introduction to the Library and Information Profession

IST 601: Information & Information Environments

IST 613: Library Systems and Processes

Fall 2007

IST 605: Information Resources, Users and Services

IST 616: Information Resources: Organization and Access

Spring 2008

IST 677: Creating Managing and Preserving digital Access

Summer 2008

IST 614: Management Principles for Information Professionals

IST 618: Survey of Telecommunication and Information Policy

Fall 2008

IST 553: Information Architecture for Internet Services

IST 676: Digital Libraries

Spring 2009

IST 502: New Directions in Academic Libraries

IST 637: Digital Information Retrieval Services

IST 690: Independent Study - Library collection evaluation plan based on academic programs and users' usage (研究レポート)

Summer 2009

(このコースは Digital Library Certificate course - 修了後も興味があったので追加受講)

IST 681: Metadata

(小島) [IST] 613 は、えっと私はオンラインのでやったのかな。これは絶対です。

(中村) 613 はもうオンラインのでやったのですか。

(小島) もうオンラインのでやった、夏休みに。

(中村) え、アメリカに住みながらオンラインのでやったのですか。

(小島) ううん、これね、私だけお願いして早くはじめられるようになりませんかって言って、2007 年の 5 月からもう私だけもう既にはじめていたのです、613。

(中村) なるほど。

(小島) えっと、5 月のゴールデンウィーク明けに行うコースがあるのですよ、夏のコースで。もうそれが開講されていたので。私は一応このコース (IST 511) を受けてからが前提なのだけれども。

(中村) どんどん進めたかった。

(小島) 進めていかなきゃいけないし、仕事もあるからお願いだから先に進めさせてくれって言ってお願いして、これやらせてもらったのです、オンラインのコース、先に。そうすると三つ終わるじゃないですか、夏に。かなりキツかったのですが、だから全部終わらせて。

(中村) へえ。これ 5 月にはじめていつ終わるのですか。

(小島) これ 5 月にはじめてこれは 8 月、8 月ですね。8 月のはじめに終わる。

(中村) このオンキャンパスのは、8 月から？

(小島) えっと、2 週間、2 週間の、まあ 4 週間、1 ヶ月いた。1 ヶ月くらい。

(中村) じゃあ8月丸々向こうにいたのですか。

(小島) ううん、7月の2週目くらいから8月のはじめくらいまででしたね。

(中村) どうでした、これ誰、こういうのがJillなのですか。

(小島) Jillはね、この時まで出会ってないです。まだ、Jillはこのへん (IST 677) にいて、このへんは違う人で。

(中村) どうですか。いきなりオンキャンパスの。まあでも5月にこれ (IST 613) をはじめてたのが、けっこうよかったですかね、かえって。

(小島) あとはね、私、たぶんこの大学のおかげよね。もう常に留学生といるからあんまりなんというか、そんなにね。

(中村) そんなにカルチャーショックとかはなかった。

(小島) ないない、全然ない。常にほら、留学生といて話をしたりしているから。それよりもアメリカ人が多いかなぐらいなので、あんまり環境には。

(中村) こっちのオンラインのコースはどうですか、なにか衝撃とか。

(小島) ああ、やっぱね、英語ですね。急にバーンって急に授業で先生がバーンって喋りだして、課題とかも出されてて読まないといけないし。あの試験もね、オンラインの試験でしょ、バーンと読んでいって、TOEFLのなんか試験みたいな感じですよ、メールが。だからまずはこう学力それが普通のね、バーンと喋っているのじゃなくて専門的なことも言っているし。ちょっとね、そのへんで耳がその、普段の人と人でキャンパスで話しているのは楽なのだけど、なんかちょっとオンラインのってなるとまたちょっと違う、その勉強の、よっぽどやっぱり語学もうちょっと勉強しといた方がよかったかなって思ったりしたけども。

(中村) 最初。

(小島) 最初はちょっとキツかった。

(中村) あのリーディング・アサインメント (reading assignment) とかって日本では手に入らない本とかけっこうなかったですか。

(小島) それはシラキュースの方で全部用意してくれるの。

(中村) え。

(小島) リーディング・アサインメントのやつで。

(中村) オンラインのところに上がるのだ。

(小島) あのライブラリー・マネージメント・システムがあって、Blackboard っていうのですが、その中にアクセスすると、必要なものがそのコースごとに全部準備されているのですよ。

(中村) 準備されているって、そのええっと、電子体でってこと。

(小島) そう、電子体で。

(中村) じゃあ電子体で準備されていることしか、反対に言うと、リーディング・アサインメントにならないってこと？

(小島) もちろんコアの本は買わないといけないですよ。

(中村) それはどうやって買ったのですか。

(小島) それは私、Amazon で。

(中村) Amazon で。

(小島) Amazon で買えるから。

(中村) どんどん取り寄せたのだ。

(小島) どんどん取り寄せて、それはもう買って。

(中村) お金に糸目はつけず。

(小島) それはもう仕方ないね。あとは細かい [資料は電子体で用意されている]。

(中村) じゃあシラバスを見るじゃないですか。アサイメントなりのリストがあったら、それ学期のはじめに電子体で手に入るもの、入らないものってやって、入らないものは全部 Amazon で頼む。

(小島) そう。

(中村) はあ、すごい。

(小島) あとはもうほとんど先生がっていうか、もうそのコース用のシラバスごとに、そのなんていうのかしら、アクセスするところがあって、その取っている学生しかアクセスできないのですが、そこに例えば一週目に読むもの、二週目に読むものって全部入っている。

(中村) あの雑誌、そのジャーナル・アर्टICLES (雑誌記事) はだいたいそれで読めちゃうのですか。

(小島) そう。で、本のやつでちょっとしか使わないのはあるでしょ、チャプター (章) の、それも全部入っていました。だからそこに行けば自分で準備しなくても、先生の課題みたいなのも全部入っているし。

(中村) なるほど。で、本ってどのくらい買いました？一コマにつき。

(小島) その先生によるね。Jill なんかは本、買わせなかったっていうか、別にいらない、こっちの方で準備するからこのね、リンクにいけっていう人もいれば。レファレンスがこれ、やっぱりこの関係はありましたよね、この関係は本がいったね、はじめの、やっぱり。

(中村) 511 と 601。

(小島) それはコアになるものだから買えって言って買わされた。

(中村) 2、3冊ずつくらい。

(小島) 2、3冊ずつくらい、それは買いましたね。本は。で、持って行った感じ。

(中村) まあ、これはオンキャンパスにいるのだから、そのこのブックストアで、ユニバーシティ・ブックストアで買って。

(小島) まあね、行けばね。そういう感じで。

(中村) みんな、だいたい買って。

(小島) そう、みんな買ってっていう感じで。確かにね、オンキャンパスの方がね、人とのやっぱり、インタラクティブなっていうか、そういうのがあったりするから勉強するのは楽しいですよ、これね。

(中村) あ、そう思います。

(小島) それはもうそう思う、もちろん。

(中村) なるほど。最初のこの 613 ではあんまり人と出会った感じはしなかったですか。

(小島) まあオンライン上だからだろうなあ。もちろんね、オンキャンパスだったらもっとなんかってなったかもしれないけど、でもオンラインのだからこそいいっていう面もありますよね。

(中村) ちょっと考えて日本人だったらね、英語、外国語での英語の発音って、口頭よりラクだったり。

(小島) そうそれはあるかもしれない。向こうが、なんていうのかしら、文章で書いたことって読んだらわかるわけだから、クリアにわかりますよね、私が言っていることが書いてあるから、クリアにわかってくれて、そういう面ではよかったのかもしれないし、その文章面ということでは。私がわけのわからないこと話しているのを、向こうは私が言っていることをきちっと書けばそれを理解するから、そういう意味ではいいかもしれないね。あのきちっと話せなくても、自分のアイディアがあれば、そういう発言になるので、それはいいのかもしれない。

れない、日本人にとってはかえって。

(中村) クラスメイトって何人ぐらいいました？

(小島) その、やっぱり何人までって決められているのですよね、オンラインのだと。

(中村) OH. 本当？

(小島) うん。

(中村) そうですか。

(小島) そう、必修のは、もちろん人数が多くなるから。そうすると必修のコースでは同じコースでも3つくらいできちゃったりする時がある。でも人気のある先生とかいますよね。

(中村) 511、この中だと。

(小島) そうそう、そうするとそのアプライした順になっちゃうから、やっぱり先生方のその要するに、バックグラウンドとか、口コミっていうのを聞いてそこいっぱいになっちゃったら、この先生ダメだからからこの先生取りなさいみたいな、そんな感じですよ、人数はそんな多くしない。

(中村) 2、30 人ですか。

(小島) そうですね。あ、オンラインのはもっと少ないね。オンラインのは20人とか、多くて30人近くはなかったと思う、そんなに大きくはしない。いっぱいにはしないね、だからそのいっぱいになっちゃうとうん、分けちゃっている感じなので、たくさんにはしてなかったと思う。そんないませんでしたよ。

(中村) なるほど。このオンキャンパスの2クラスは。

(小島) それもやっぱりあの、グループっていうかその分けられて。あの一斉に受けるのもあるけれども、ちょっとずつのやつだったらグループに分けて、大人数でしないのですね、分けていて。あとでプレゼンもあるので、私なんかもうグループが、そのプレゼンのグループが8人ぐらいしかいなかったんで、すごく細かくわかれていてね。じゃないと発言しないでしょ、みんながこう自分が主体になって言わないじゃないですか。だからそれがよかったかな。

(中村) じゃあクラス全体としてはこの601と511とかっていう入門のクラスは、5、60人いる。

(小島) あ、多かったです、もっといましたね、もっといる。

(中村) でもそれをグループに分けて。先生は1人、その多い中に。

(小島) あのね、要するにまあ何十人かは忘れたけども、それを二つに分けてその中でもグループに分けたから、だから大きな一斉の授業はそのメインの先生がやるけれども、色んな要するに分れてするやつがありますよね、あれに関しては分けていましたね。講義はもちろん一斉に先生が、メインの先生が1人、2人だけだけれども、その他のやつっていうのは。

(中村) じゃあこれたぶんその年の、その学期に入学した人が、全員が一応そのクラスを取るわけだよね、この二つに関していえば。

(小島) この夏のやつとあと秋がメインでしょう。

(中村) はいはい。

(小島) あのオンキャンパスが。これはオンラインのコースだから。この人たちが511とこれ(601)が。オンラインの人のためのサマーのコースなのです。だから秋の方がもちろん多いです。これオンラインの用のオンサイトなのです。秋の人は8月の終わりぐらいからキャンパスはじまるわけだからそれに出るわけですよ。

(中村) なるほど、なるほど。

(小島) はい、だから私、キャンパスの人は知らないです。一応、これはあくまでもオンラ

インのコースの人たちの集まりです。

(中村) これで出会っているっていうのはやっぱり重要？

(小島) 私はよかったね、出会って。

(中村) あ、そうですか。

(小島) 結局、そのときに会った人が今もずっと仲良くしているのが多いから。

(中村) あ、そうですか、へえっ。

(小島) うん。私はこのキャンパスはよかったですよ。

(中村) ここで出会って名前を知っていると、あとのオンラインのクラス受けているとあの時のあの人かなぐらいはわかるとか。

(小島) うん、やっぱり会っているか会っていないかとでは全然違うよね。今もその付き合いがあるそのシンガポールの彼とも、あの人、日本が大好きで毎年来るのですけど、必ず会っているし、あのPさんっていう人が[後で]出てくるのだけど、彼女もそうだし。その他に連絡取っている人みんな。

(中村) この時に会った。

(小島) この時に会った人。まあ一人、二人オンラインのもっていうのもあるけども。

(中村) [オンライン] で、会った人もいる。

(小島) うん、でもやっぱりインパクトのあるのは顔で会っていると全然違いますよね、オンラインのでも。

(中村) 一緒に寮に暮らすのですか。

(小島) 一緒に寮。

(中村) 4 週間か。

(小島) 私はよかったですけどね。

(中村) そうか。で、それぞれ取って行って、Jill と出会ったのは次。

いちばん楽しかったクラスIST 677

(小島) そう、Jill と出会ったのはここ (IST 677) なのですね、スプリングの 2008 って書いてある、これですね。

(中村) 彼女は special library (専門図書館) なのでしたっけ、元々は。専門は。

(小島) そうですね、専門はね。Jill 自体もそのコピーライト (著作権) っていうか、そのデジタル化してそれを企業の、ビジネスの時にどういう風に、デジタル化のものを使ったらいかっていうのが元々のお仕事でしたよね。それを図書館の方に戻ってきてっていうことで、実際にそういう仕事をしていたので、理論だけじゃなくて実践っていう面で彼女のコースはすごい役に立った、私は。それを人に使わせるっていうことまで含めてやっていたので。

(中村) なるほど。これ、取るものっていうのはご自分でほとんど決めて、アドバイスとかもらわない？それともこのオンキャンパスの時とかに何かこういうアドバイスもらってとか。

(小島) そうですね、その取り方は言われましたね。これをまず最初に、このコースを取った後にこれを取れ。要するにこれは…

(中村) 511 の後は 605。

(小島) 605 がね、レファレンス関係ですね、いわばね。616 が目録関係にあたるよね。どちらかというね。それは先に取れと、秋に取った方がいいよって言われた、基礎だから。春以降はまあ、選択をいれて自由に取れたので、私もちょっとデジタル化っていうところで、Jill の教科を、これ二つ取ろうと思ったのだけど、かなりハードだったので、Jill のコースは。

すごくきちんとしているから。これ1こでいいやって思って、デジタル化とかってそういうなんていうの、自分でもきちっとやってみたかったので、そうすると片手間には無理だなんて思って、1教科しか取らなかったのです、この学期だけは。

(中村) これはあれですね、授業料が高いついていう話しましたけれど、登録しちゃったら授業料発生しちゃうわけですね、落とそうが何だろうが。

(小島) ううん。

(中村) どういう仕組みでした？

(小島) 登録してもドロップアウトできる週まであるから、2週間くらいあるから大丈夫ですよ。

(中村) ちょっとくらいは登録しても。でももうこの時はもう全然、登録もしないで。

(小島) もうシラバス見た時点でもうこれはって思って、まあこれを中心にして。

(中村) よく考えていらっしゃる。あとは選択と必修を。

(小島) そうですね、この2008年のこれ (IST 614; IST 618) はどっちも必修ですね。

(中村) なるほど。

(小島) 2008年は選択です、これ2つとも (IST 553; IST 676)。この553っていうのはどちらかというとはら、インフォメーション・アーカイブだっけ、web関係での構築ですよ。この676のデジタル・ライブラリーはJillの実際に勉強したので、実際のデジタル・ライブラリーを作るみたいなのを取ったのですね、私は、興味があつて。2009年に入って、これはうんとどうだったかな、この502は選択ですよ。やっぱり私自身アカデミック・ライブラリーなので、そちらの関係で。この頃一番そのラーコム (learning commons) とか流行っていたのですね、アメリカね、ラーコムやらなんやらって言われる時期の、日本ではそんなにあれでしたけど、そういうのもしなくちゃみたいなことと。

あとはここの690の「Independent Study」(インディペンデント・スタディ) って書いてあるんですけど、私のそのテーマみたいなやつのが、この502にちょっと合致してたのですよ。そのアカデミック・ライブラリーでユーザーにどういうものを使わして利用率を上げるのかとか、そういうのもやってたので、私自身はそういうことも兼ね合わせて研究レポートを書こうと思ってたので、ここに書いてあるのが、その一応、「Library collection evaluation」って書いてあるんですけど、どちらかというの本のエバリュエーションではなくて、電子のもののコレクションのエバリュエーションを私は行うというプランで。それは大学のプログラムの内容と、それから要求されているものと、実際にユーザーが使っているユーセイジ (利用) を基にして、その電子媒体のコレクションの評価を行います、っていうような研究レポートをしようと思っていたので、これにしました。

この637っていうのが「Retrieval Services」って、これ検索ですよ。ユーザーはどのようにして検索するのかっていうのと、傾向があるのかっていうのと。それからその、まあweb上とかっていうのはもういろいろ、なんていうのかしら、見えない媒体っていうのはたくさんありますよね、どうしたらこの引っかけって、その有利にこの上にアルゴリズムとして引っかけにくるのとかっていうのとか、そういうのも学べたので、それはちょっと面白いかなと思いましたね。

(中村) インディペンデント・スタディも選択科目ですよ？

(小島) そうなのですよ。

(中村) あえて選ばれたのですね。

(小島) うん、これねえ、あの、インターンシップを勧めていたのですよ、シラキューズは。ところが私もう図書館歴長いし、インターンシップはあなたしなくてもっていう感じだった

ことと、仕事休めないじゃないですか、1ヶ月も何ヶ月も。

(中村) 別のところ行くのもね、別の図書館に行くだけね。

(小島) そう、それ無理だなんて思ったので、そうするとこれしかないものね、研究レポート。だから自分で研究レポートを書いて出すという事で私は選択しました。あとはデジタル・ライブラリアンのその、なんていうのか、Digital Library Certificate のコースっていうのがあったのですが、一応そのメタデータみたいな、私ちょっと弱かったので、そういうものもやっとなかないといけなかなって思って、修了した後にこのメタデータっていうコース (IST 681) を取りました。

(中村) それは選択科目？

(小島) そうです、それ選択科目、全然もうあの、修了していたのですが、プラスαでこれ取ったっていう感じですね。全部で何単位なのかな、40単位か42単位かわかんないけど、そんな感じですかね。

(中村) コアのラインとしては、大学図書館でかつデジタル化っていう二本立ての関心で取った感じですよ、これだと。

(小島) そうですね、どちらかといえばね、そう、あの自分に一番弱い分野。あんまりその ICT の関係、インフォメーションね、コミュニケーション・テクノロジーの分野、私は弱いと思っているし、あのユーザー関係ってあたしすごく得意だし。私、常に仕事でやっている、図書館が長いから、図書館自体のリソースはわかっているって自分で思っている、違うかもしれないけど。そしたらもうちょっとテクニカルな関係で、これからの図書館としてやっぱりその web 関係とか、web も自分でやりたいし、デジタル化されたものをどういう風にそれを保存していくとかかっていうのとかを勉強しないと、常にその IT の関係の質問わかりません、お願いします、作ってくださいじゃね、駄目だから、そっちをどちらかというと私はメインにしたいなって思っていた。それがたぶん、反映されていると思います、これに。だからそれは役に立ちました、そういう関係のものは。

オンラインで上手に教える先生

(中村) 印象的だったのはやっぱり Jill のクラスなの？

(小島) Jill のコースはね、本当にね、だから私あの先生とも今、仲良くあれしていると思うのだけど、もうこの人ね、授業もね、上手だったのですよね、やり方が、進め方が。授業自体がね、他の先生とはなんかちょっと違って、あの、みんなを上手くこう参加させるのが上手なのよね、そのオンライン上にね。それにあの Jill 先生は変な話、会って話すよりもオンラインの方がね、すごく。

(中村) え、どういう意味。会って話すよりオンラインの方がいい人っているの？

(小島) 変な話、あの会うとアメリカ人としては少しちょっと地味な感じなのですよ。オンラインの方がもっとアクティブなの。

(中村) ええっ、そうなの？

(小島) オンラインの方がもっとね、なんか彼女、オンラインの方が得意なのかもしれない。すごいね、キラキラじゃないけど、上手なのですよ、とにかく。で、会った時に少し、私ね、ギャップがあったのですよね、変な話 (笑)。

(中村) 先にここ (2007 年夏) で会ったのじゃないの？あとで会ったわけね？

(小島) うん、私はオンラインで、すごいこの先生に会いたいって思っていたし。会うとそうでもなくて。

(中村) 次、いつ会ったのですか。

(小島) 会ったのは修了式の時。

(中村) 修了式の時って 2009 年の春の終わりに行ったのですか。

(小島) その時に来てくださっていて。そう。

(中村) ああ、この人なのだ、みたいな。

(小島) あら、うん？って思ったけど。だからね、そのギャップがあったからね。ちょっと地味っぽくてトーンがあれだったのですけど。

(中村) わかります、わかります。すごいこんなアメリカ人っているのだって思ったもん(笑)。でも、Afro-American にああいう繊細な感じの人いますよね。

(小島) そうなのです。だからオンラインのはね、すごかったです、この人。飽きさせないっていうか、常にそう、上手く出席して発言させるように、あの手この手を変えてじゃないけれども、課題とかもすごく面白いものが多かったから、この人はよかった。そうでした。

(中村) へえっ、なるほど。

(小島) あとね、この先生のはでも、オンラインのコースとしてはこれ (IST 677) は、Jill 先生のは抜群、一番楽しかった。

(中村) デジタル化に関わっている現職スタッフには直接、インタビューする課題というのは、こういうのはどういう人とやるのですか。

(小島) これね、私、実は、私の場合、日本にいるから日本でということになるんで、前いたライブラリアンの T さんという方、ブリティッシュ・ライブラリーの。彼女にこう紹介していたいて、実際にインタビューしたの、千葉大学の、ほら彼女がいたから。そこで千葉大学さんって。

(中村) 竹内 [比呂也] 先生とか？

(小島) 竹内先生の下で働いた S さんという方がいるのですけれど、今はもう北海道大学に行って課長さんになって、違うところに行ったかもしれませんけれど。千葉大学さんですよ、リポジトリ、機関リポジトリを一番最初にはじめたのは日本で。で、その第一人者ってということで、S さん。

(中村) わざわざ依頼したの？インタビュー。

(小島) うん。それでインタビューした場所は、そこじゃなくて。年末に、今はやってないかもしれないや。デジタル・リポジトリなんか部会っていうのが大阪の方であったのですよ。それに行くっていうので、T さんもみなさん。私、それに行ったのです。

(中村) ああ、なるほど。それは、何だろう、何か INFOSTA (情報科学技術協会) なり NII (国立情報学研究所) なりがやっている研修会みたいな？

(小島) はい、それに行って。

(中村) なるほど。それ以外のクラスで印象的なものって？

(小島) web かなあ、web 関係のこれはですね。この 553。私 web 構築する上で、どの視点でどういうこと見なくちゃいけないのかっていうのがまったくなかったの、そういうのってやっぱり目新しいじゃないですか。だから、そういう意味では、私にはすごく役に立った。どういうところを見て作られているとか、ユーザーから見た側とあとは構築する時にその検索に関してどういう風に思っていた方がいいかとかっていうのを合わせて。そういえばこの 553 っていうのと、この 637 って対になるとは思いますけれど、選択の。

(中村) まあ、でもやっぱり Jill は教え方も上手いって、内容だけじゃなくて。

(小島) そうですね、はい。だから、教える先生にもよると思いますよね。ただ単に課題を置いて、はいやって、って上げておきなさいっていうのだとね。あんまり参加がないじゃないですか、オンラインの、そうすると。だけど、こうみんなが参加出来るように、オンライ

ンのって特に先生が上手く誘導していかないと、好きな時間帯にアクセスして課題さえやっちゃってれば、発言したってことになっちゃうから。それだと危ないじゃないですか。ねえ。自分一人っていう孤独感があるけれど。なんかこうまい具合にグループのワークにしてグループ同士で、こう何て言うの、協同してさせるってこともできたりとかっていう風にさせると必ずねえ。今は最近、グループが多いと思いますけれども、そういう仕組み？あとは誰をリーダーにっていうのもあるから。上手いこと先生が、陰であれしているのかもしれないし、リーダーを。

(中村) リーダーをアサイン (assign) させるみたいな？

(小島) そういうのをやっていかないと失敗しちゃうこともあるだろうから。先生の采配っていうのも…

(中村) どういうグループを、例えば Jill のクラスだと組んだわけですか、記憶にありますか。

(小島) 私はね、もうね、先生が既にアサインしていて。

(中村) どういうグループを。

(小島) わからないですけど、でも。

(中村) カルチュアル・バックグラウンド (文化的な背景) で？

(小島) やったのか。でもアメリカ人がほとんどだったから、外国人は私だけだったので。

(中村) でも、どこに勤めているとか言わなかったの？

(小島) あ、それはあるかもしれない。図書館で働いているとか、YBP っていうほら、ブックベンダーに勤めている人もいれば、データベースの会社に勤めている人もいれば、全然関係ないところに勤めている人もいる。そのへんは分けたかもしれないけれど。

(中村) [Jill] 先生は、4、5人でグループ？

(小島) 大体。先生が分けるパターンが多いですよ、だいたい。

(中村) どのクラスも。

(小島) そう。このグループ、このグループって。

最善を尽くし、やりきった！

(中村) 総合的な満足度ってほぼ満足なのですね？

(小島) あ、そうですね。満足っていうかやりきったっていうか、自分の中ではもう、いろいろ欲を言えばっていうのはあるかもしれないけれど。受けた中では、自分の中では、ベストなものを選んだと思うし、自分でも最善を尽くしたから、そういう意味で、自分がもうやったっていう気持ちを込めて、満足っていう事になっている。

(中村) いや、でも5、6時までではここで働くでしょ、どんなに早く帰ろうとしても。それから時間を見つけるのですか？それとも平日はやらないで週末だけとか。なんかこう決めているのですか。

(小島) いや、それは必ず毎日アクセスしないと。アクセスログも残るし、オンラインの学習って録画も残りますよね。どのぐらい滞在したかって。で、その自分の発言。皆さんがそれぞれ発言していてそれに対しての返答もしないといけないし。自分からのプロポーザルじゃないけれど、こうだけどどう思うっていうことを受けて、それを膨らませてみんなをこう何て言うのかしら、自分で提案することも必要だし、人が書いているものに発言することも必要だから。そう思うとやっぱり、なんか心配ですよ。自分だけログインしていなくて発言していないと。

(中村) 毎日、帰宅したらログインしていたのだ。

(小島) 毎朝。

(中村) 毎朝。

(小島) 毎朝、昼もしたり、昼もできるだけお昼を食べながらしたり、時間がある時にちょろちょろ見て、ああそっか、とか。

(中村) ちょっと考えたりとか。

(小島) うん、ちょっと。それはもう時間さえあれば、どこからでもログインできるから。

(中村) そのログイン滞在記録の長さって、成績にも影響しているのですか？チェックしているとか。

(小島) それは、そういうのを先生も見ているかもしれないけれど、それにはそのシラバスのどういう構成で点を決めますよっていうのは入っていますよ、もちろん。でも、ちらっと先生は見ているかもしれないね。

(中村) どのぐらい出ているとか、エンゲージ (engage) しているのか。

(小島) どのぐらい出ているのか、とか見ているかもしれないけれど。それは入っていない。ただ、クラスの。

(中村) でも、そういう問題じゃない。

(小島) 違う違う。私はもう楽しいから (笑)。どういう風になっているのか見たいから、常に見たい、私が。もちろん、そのクラスのパティシペーション (participation) っていうのがあって、それはやっぱりその要するに、必ずどのぐらいまではこっちに参加しなくちゃいけないっていうのがあるから、それは率として見ていると思うけれども。

(中村) 発言回数とか。

(小島) うん、そう。パティシペーション、何パーセントとかあってあるから。あとはね、そのレポートの点とか、グループでのそのトータルの点とか、貢献度みたいなものとか、あとはオンラインのテストもあったりして得点になるので。

(中村) いつまでこのことディスカッションしましょうとかってやると、終わる、終了の1時間前にログインしてきて、わわわって言ってもう、前の1週間かけてみんなで議論してきた本を、読んできたかもわからないみたいなので、とにかくでも発言した記録を残すためにわあって書く人っていますよね？

(小島) いますね。

(中村) それはもう一定数いても、もうそれはそういうものだと思って。

(小島) そういうものですね。

(中村) で、真面目にやっている人はお互い、お互いの流れも全部、ついてこれていて、その人たちと、最後にラッシュしてわわわって言うのは…そういうもの、と、お互いそういう感じ。

(小島) そう。でもキャンパスいてもそうですよね、クラスの中にいてもじいっと黙っていて発言しない人もいれば、常に手を挙げている人とか。そういう人たちと、みんなが同じっていうのはね、なかなか無いですよ。

(中村) なるほどなるほど。それはもう全然お互い関せず、自分のペースでやっていくと。

(小島) 自分のペースですね。ただ私はまあ出来るだけ仕事中は仕方ないし、会社とか、寝る時間は仕方ないけれど、それ以外はもう、私は見たい好奇心でいっぱいだったから。どういう風に発言するのか、私の書いたものがどういう風に言われているのか、すごく気になるから。私はけっこう楽しみでログインしていました。

(中村) そういう人の方が多かった印象ですか？受けてみて。

(小島) そうね、そうじゃない人ってやっぱりドロップアウトしちゃうのですよね。

(中村) あ、そうなのですか。

(小島) いますよ、途中で。

(中村) なんか消えちゃって、修了式にいなかったりとか。

(小島) ああ、じゃなくて。ギリギリまでの時もあるでしょ、あの時にやっぱり。

(中村) ああ、期限切れちゃうのね。

(小島) うんうん、消えちゃう。それからね、[授業料が] 高いわけだから、そんな人はあんまりいないけれども。覗くだけの人もいるので。

(中村) 最初の2週間ぐらいはちょっとしたお試しの、みんな何となくざわついている感じであって。

(小島) うんうん、そうですね。それから落ち着くって感じです。でも、その後、続けると割とみんなコンスタントにログインして。

(中村) なるほどなるほど、よくわかりました。WISE (Web-based Information Science Education) は、どうでした?使ってみました?

(小島) 私ね、一つしたいなと思ったのですけれど。そうすると何て言うのかな、イリノイの一回とりたくなって思ったこともあったのですけれど。

(中村) イリノイ、こだわりますね (笑)。

(小島) そう、ところがやっぱりね (笑)。時間帯にしてって言うか、ちょっと厳しいなっていうのが働きながらだと。そのライブみたいなのがあったのですよね。駄目だなって思ってやめました。三つ取りたいって思ったのですよ、興味があって、他のも。でも、やっぱり仕事しながらって、いろんな面で時間帯とか、あとね。

(中村) それってシラバスに書いてあるのですか。

(小島) WISE でこういうのがありますよってアップされているのですよ。詳しくは、みたいなことでリンクをクリックするとそこにその内容が書いてあるのね。アップされているのです。一週目は何、二週目は何って書いてあったので。それがもうオープンにされているのです。

(中村) だから、その時にハードルだったのは、同じ時間に座ってチャットなり何なりで話しますみたいなだけが理由。別にほかの大学のが、心のハードルがあったとかそういう話じゃなくて?

(小島) ないない。それはない。クラスの内容としてはやっぱりシラキュースの方が、もちろん、ここの大学にいるっていうこともあって。内容的にはもう盛りだくさんになるし、あとは。私はどちらかというとその ICT 関係の強化をしようと思ったから、それだとシラキュースの方がずっといいのです。なので、別に他のを受けようという気はなかった。

(中村) で、イリノイでとろうというのは、何の科目なの?

(小島) なんかね、あれはね、あれですね。一つには今でいうライブラリアンシップみたいな。今はそのライブラリアンシップだの何だの言われているじゃないですか。アカデミック・ライブラリアンシップだのなのだからって、その基礎になるような感じなのだと思います。

(中村) それってたぶんこれ (IST 502) だよな。

(小島) そう、これですね。ニューディレクション、これがあったからよかったし。その前の時にちょっと受けようかなっていう。そうそう、でもこれができたからよかったのですけれど。

学習支援体制と同級生

(中村) メンターは誰がついたのですか。

(小島) メンターはね、あの、お願いすればつくし、私も誰か一人ついてたのですよ。名前

してもらえて、一年のあいだ、[何かあったら相談に] 来てね、みたいな？

(小島) そう、一応こういう人がそうですからってことで、顔だけはあわせさせてくれて。で、顔を知っているとやりやすいじゃないですか。あとは、じゃあオンラインのでねってことで。

(中村) メンターに頼っている人っていうのは、いるはずですよ？

(小島) いると思う、いるはずですよ、普段。

(中村) みんなそれぞれ、自分の。たまたま P さんって人に出会えたので、彼女にいろいろ聞きましたって話ですよ？

(小島) 私は、そのメンターの L 先生はあんまり応答が遅く、早くなかったのですよ。遅かったのですよね。ちょっと、一つ二つ遅かったのですぐに答えてくれないので。それ待って。

(中村) 待ちきれないから、ちゃちゃっと応対してくれる P さんが良かった。Skype とか Blackboard とかのチャットとかいくらでも、そういう相談相手はいくらでもあると。

(小島) そうですね。

オンラインで学ぶということ

(中村) ちょっとじゃあ、次の段階に、そろそろ時間もあれですし。えっと、どうですか、オンラインの教育をやってみて、良い点。

(小島) まあ、これは、もう本当に時間管理が出来るという事。私は、やっぱり仕事しているし、家事もあるし、ということになると自分の中である程度の管理がしやすいという事で。あとは、学習についても自分の時間を決めてログインして進められるので、あとはそのコースに必要なものが、自分で用意しなくてもコースパックの中に入っているの、インターネットから ID パスワードで入力すれば、教科書、無くてもいくらでも入れるってことは、良かったということですね。あと、問題点ということで、先ほどもちらっとお話に出たのですけれども。まあその、グループ課題という事でやっているのが最近、多いのですよね、私の時も、もうそうだったのですけれども。なので、時差、例えばみんなで一斉にってなるとやっぱり時差があるので、でもみんな気を使ってくれて、少し私にも合わせてみたいな感じで、どこかでこう落ち合わせてみたいなことが、ネックになりました。後はまあ、積極的に発言していないっていうのはあると、オンラインのに入っていないと本当に出席しているのかどうかっていうのがわからないので。常にそう、自分もいるのだよっていうことをアピールするためには、やっぱりいるだけじゃなくて発言するという事。

(中村) ネット上では、なるほどね。

(小島) そうしていないと、いるかどうか本当にわからないじゃないですか。先生はログを見れるけれども、ということ。

(中村) 他の学生に関しても存在感を見ているのだろうけれど、わかっているのだろうけれど、この人、存在感ないなみたいなことを思うわけ？やっぱり、学生目線でも。

(小島) 特にアメリカの人そうじゃないですか、発言しないと。この人なんか考えているのかな、と。ありませんか？

(中村) あると思う。やっぱり発言しないと駄目ですよ。

(小島) 駄目ですよ、あの文化は。だから、とにかく、間違っているでもいいので、とにかく自分はこの人だけれど、と常にそう言っていないと。この人、お馬鹿なんじゃないかなっていうのはね、あるのかなって感じもしていたので。というか、私自身そういう風にここに来ている学生からも、アメリカ人は常に発言していないと駄目なのよ、っていうのをよく聞いていたので、そうかそうかと思って、それを鵜呑みにしてとにかく間違っているでも答

えるというスタンスでした、はい。あとは、そうですね、やっぱりね、常にモチベーションを高めていないといけないので。やっぱり、私がしたことはみんなに言うておくことですね、今は勉強しているから飲み会誘っても出ないから、飲み会もダメダメって、付き合い悪いと思わないでねって。これ終わったら私、出るからねって、今はもう許してって、だから、ああそっかそっか、小島さん勉強しているからってなって。はじめから駄目なのだよって言っていたのです、触れ回って。で、本当に家事の方も手伝ってもらったし、みんなにもそう触れ回ったので、あんまりこう、気まずくはならなかった、人間関係で。

(中村) 確かにあれかあ、そっかあ、要するに学校だったらもう行っちゃえばね、あれだけど。オンラインのだと、言うてないとみんな勉強しているって知らないですものね。まさか学位取得のために…

(小島) そう、仕事でも、今日は私、ちょっと大事なのがあから帰るからって言ったからにはやらなくては、言ったからにはちゃんと修了しないと恥ずかしいじゃないですか、だから。自分にかまかけるために言うていました (笑)、言いまくりっていうか、ということです。後はまあ、語学という点で、やっぱりもうちょっと、ああ言葉がもうちょっとできたらなっているのは常にこういう言い回しどうなのだろうって考えちゃいますよね、こうね、確認してみたら。

(中村) ネット上のスラングってまた別にあるみたいですよ、私、わからないのですけれど。

(小島) そうなのです、そう、それがね、やっぱりこう、私にはわからないっていうところも多々あって。でも、知らないのに使われると変だから、私はもう外国人だし、もう知っている言葉で、自分の知っている言葉で書こうと思って。レポートもそうだし、なんか先生も私が全部書いたってわかると思いますよ。それが、いい言葉で誰かに書いてもらったってレポートじゃなくて、自分で、全部自分の言葉で多少なにかミスがあったかもしれないけれど、そのまま全部出したので。

アメリカの大学で学んで

(中村) 今、現職に就かれていてって言うても、元々現職にいらしたわけだから、職場で結局、戻るとかいうような、一回離れたようなこともないし。どうですか、オンラインの教育で学んで、どの辺りが役に立っているかとか。アメリカではそれは通用するけれど、日本じゃちょっと違うよね、みたいな点も、Library Science とか、どうですか。

(小島) ううん、一つはね、私自身について言えば、自分に自信がなかったわけだから、その点に関してやっぱりこの前のライブラリアンの方がいらしゃったその歴史を、私のこの、私じゃないや、ここで終わらしてこの大学の図書館があって廃っていくのも見ていられなかったし。ここで長く働くのであれば、それなりにそういったサービスを提供したいっていう事を思ったことがきっかけだから、そういう意味では、まず自分に自信が持てたってことが良かったことと思う。おそらくはそれから迷いがなくなったかな、誰かに相談しなくちゃいけないかなっていうことも、あればいろいろネットワークがあるわけだからできることもあるし、そういう意味で私、その自分の気持ちがすごく変わったってことが多いし、それなりに勉強したってこともあるからだと思うのですけれども、そういうことぐらいでしょうかね。だから、もちろん仕事にもね、web のことですかデジタル化のこと ICT に関することは別に上の人に聞いてないから、役に立っているの、そういう意味では大学にとってもいいことだと思うし、自分にとってもラクになるっていうことだと思いますね。

(中村) なるほど。授業で、アメリカではこうなのだけれど、自分の、まあでもここアメリカ的な運営ができちゃうから、そんなに齟齬っていうか、学んだことと現場でそれが繋がら

ないみたいなことはあんまり感じないですか。

(小島) そうですね。ここ自体は、そういう環境であるので、あんまり何かこう差異があるっていうのは、なのね。

(中村) なるほど、日本の国立大学とか勤めていたらありますよね、きっと。なんかいろいろ、できないみたいな。

(小島) きっとね、あると思います。ここに関しては、この大学に関しては、いいところは小規模な大学なので、スタッフの声もすぐにこう反映させられて、トップとこう何て言うのかしら、ここにいてこうじゃなくって、トップともすぐに話ができるのね、学長とも、そこにいます。学長って言うても、腕を引っ張れば。ここに来たら学長ともすぐ話をしていかれて、すぐ話ができるっていうのは、すごくいいところだと思います、はい。

(中村) ええっと、この日本の司書資格の方も取っておられたと思うのですがけれど、司書資格と、司書資格の背景なのかベースなのか、一応、日本でも図書館情報学っていう分野をベースにして資格付与教育っていうのを一応やる方向で。学的ベースがないままの司書養成であるとか司書教諭養成であるとかっていうのは、日本に存在するかもしれないけれども。一応まあそれがベースだとして、どうですか、玉川〔大学〕で司書資格を取ってみて学んだものと、アメリカでオンラインで取ってみて比較的な、比較するような気もちって今まであんまり思ったことなかったですか。延長、発展上にあった感じですかね？

(小島) そうですね、私の場合は本当に図書館の畑にいなかったわけじゃないですか。だから、図書館の仕事自体がもう新しくて、新鮮でしょ。で、その新鮮の中に司書の資格を受けているから、だからあんまりその、何て言うのかな、蓄積がなかったの、その当時はその当時で司書課程のやつはそれなりに私にとっては良かったのですよ、それなりに満足。ただ、この図書館の中で勉強していくにあたって、それだけでも全然足りないっていう風に思っているわけじゃないですか。で、その過程があったからこそ、この。

(中村) どこが特に足りないところでした？

(小島) ううん、どこが足りないっていうのが、私のその見た感じになると、やっぱり利用者を視点としてっていうのが、日本の図書館だと、なんか何て言うのかな、まずこの書籍とかなんかあるものその所蔵数がなんとかとか、こういうものがあって、これがあってっていうのが中心になんか話が、なのだけど。でも使う人がどういうものを求めているかとか、どういうことを望んでいるかっていう元々のその何て言うのかな、人と物って考えた時に、その場の物はまずその本、江戸時代からそうですね、そういうものがあってそれを保管するために、分類するためにこれが必要だっていうことから始まっている気がするの、何となく。だけど、こっちのへん（アメリカ）に関してはそれもあったかもしれないけれど、でも、どちらかっていうと、色んな人にこう世界を知ってもらうじゃないけれども、古い世界のものを、新世界の人にも知ってもらうために、図書館を建ててこうやってっていうのが元々だったって思うのね、私は元々だったと思うのですよ。だからね、歴史はあんまり変わらないのですよね、確かアメリカの図書館協会〔ができて〕140年ぐらい、こないだのアメリカのライブラリーのムックにも載っていましたが。ここ（日本）はこのあいだちょっと読んだけど、108年ぐらいでしょ、日本の図書館協会ができて、そんなに140年と108年しか変わらないのに、なんでこんなに開いちゃったかなって考えると、常にその持っているこの世界を色んな人に伝えて垣根がこうっていう思想と、この本を昔からあったものをこうやって保存して分類してそれを大切に保存していきましょっていう、そういう組織文化的なものが若干違ってきたのかなって。私、勉強してきてないからわからないのですが、そういう印象を受けていたのですよね。

(中村) なるほど。だから、ユーザー・センタード (user-centered)、今、流行りのっていうか、まあちょっと古いかもしれないけれど、ユーザー・センタードみたいな考え方っていうのは日本の司書資格課程で学ぶ時にはほとんど感じなかった？

(小島) 理論的なことは多くて、こういう書誌学、そしてね、それから入ってですよ、図書館マネジメントのやつとか、あんまりそのユーザーなんとかっていうのは無かった。司書のやつにあったのかな、まあ、あったと思いますけれどレファレンスの中でね、レファレンスのやつ。

(中村) でもレファレンスもレファレンス・ブックをするのもけっこう、時間がかかりますからね。

(小島) ねえ、そのレファレンスのアプローチの仕方も、今はもうちょっと変わっているかもしれないけれども。もちろん、その昔から引き継がれてきた知の財産っていうものを何かの形で書籍じゃなくてもデジタル化して、っていうのは大切なものだけれど、それをもっと多くの人に見てもらったりして、使ってもらったりとかっていうことをしないと何か意味があるのかなって、常に私はそっちの方が何か…

(中村) インフォメーション・ディセミネーション (information dissemination) みたいな。

(小島) 使ってもらって見てもらって感じてもらって、だからその媒体はなんでもいいと思うのですよ、私は。

(中村) なるほど。あとは、スタッフ・ディベロップメントみたいなことは…

(小島) そうですね、スタッフ・ディベロップメントに関しては非常に、他の私大の図書館の人の話を聞いても、この人また異動しちゃったとか。折角ね、図書館で頑張ろうって思っているにも関わらず、その人の気もちとは裏腹に他の部署に異動させられちゃったりとか、っていうことが多々あるので、そういうのってもうちょっとなんかこう反映されないのかなあとその大学のね、もちろん、職員の一人っていうことでみなされているっていうのもあるから、仕方ないとは思うんだけど。それは非常に、何て言うのかしら、残念なことだし、公共図書館もね、指定管理の制度でしょ、今ね。時給でね、すごく安いコンビニの人みたいな感じで雇われていて、そういうのばかりで、若い人たちが図書館の大学に行こうなんてもっとも思わない、就職先無いものね、だってね。資格取ったとしても本当に行き場がないから、何か夢がないわけじゃないですか。そしたらもうちょっとね、いい就職先のところとかで学部を選ぶし、もともとね、日本の大学自体がそういう学部っていうのが作られてこなかったぐらいの、危機感ですよ。だから私やっぱりね、偉い人に、[図書館関係者の] 誰かが偉い人にならないといけない (笑)。決断的に、もうパァンとやらないと急な変化は起こらないと思うのですよね。常に思うのですよね、何かああいう風に政治家の一人でも日本の図書館のこの質の遅れをとっている、だからやりましょうっていう感じで。もうそれはこうなのだっていう感じでトップダウンでぽおんと、ってやればもっと早く動くと思うのですよね。

(中村) 小池百合子さんね (笑)。

(小島) そうそう、みたいな人が現れて、すっごく早く変わるのじゃないかなと思って、だから私、中村先生みたいな人に政界に入ってもらって、そこでそういう改革を、それひとつでいいと思うのですよね (笑)、改革ってことのために。もちろん、その待機児童もなんとかだけれども、今の子どもたちにそのね、図書館自体もだって、少ないところたくさんありますよね、あの人口につきっていう。そしたら、そういう機会がなくて、触れる機会がなければ、そういう文化がなければ、そういう大人になっちゃうわけでしょ。だから、そういう政治家が出てもいいのかなって思って、全国に。図書館を増やして、図書館の専門的な人

を増やして、そういう組織文化がもっとこうね、作っていくっていうことにすれば、なんか。

(中村) なるほどね、リーダーシップが…

(小島) ない。誰かいますか？

(中村) 確かに図書館の世界だけでもじゃもじゃやっても、なかなかうまくいかなかったっていう。

(小島) そうなのですよ、だから私はやはり政治の力かなって、変な話ね。だからそういう人が必要で出れば、どんなコネクションかわからないですけど、もっと早くね、動くと思うんですよね。だから、私は中村先生みたいな人に、そうやって目指す人が一人ぐらいいてもいいのかなって思うんですけど。全然、駄目じゃないと思う、一所懸命、先生はしているのだけれども、なかなかね、なんとかの階段で古い人たちが、いちゃもんつけてね、結局、元に戻ったとかったりとかなんとかってあるじゃないですか。そういうのを繰り返してきているわけでしょ。歩みはじめられないですけど。だから、もう歯がゆいですよ。

(中村) そうですね。ごもっともです。今日はほんとうに長くお話をおうかがいしました。ありがとうございました。

(小島) ありがとうございました。